

【選択領域】試験一括型

主な受講対象者	小・中(音楽)(美術)(社会) 高(音楽)(美術)(地理歴史)	履修対象職種	教諭
開設講習名	【選択】芸術史学の現在		
開設日	令和3年(2021年)12月4日(土)		
担当講師	1～2限 松田 聡 (教育学部教授) 3～4限 田中 修二 (教育学部教授)		
履修認定試験<試験一括型> (4限終了後に試験を実施します。)		試験時に配付資料・ノートの参照：可 (タブレット端末の参照は不可)	
担当講師からの連絡事項等 当日、資料を配付します。			
1限 (9:00～10:15)	<p>「芸術に触れること」をテーマとし、音楽(1～2限)と美術(3～4限)を例にして考察を行う。</p> <p>多義的なテーマ設定となるが、まず、「物事に出会う」といった比喩的な意味で「触れる」を捉えよう。学校における音楽や図画工作／美術の授業は、その意味において、子どもたちに音楽や美術に触れる機会を与える場として理解することもできるから、これは教育に直結するテーマともなる。</p>		
2限 (10:30～11:45)	<p>芸術一般について考察する際には、芸術に専門的に携わったり、特別に関心を寄せたりする人々より、むしろ「一般の」人々(そこには子どもたちも含まれよう)の芸術への接し方が問題になる。その観点から過去の状況を振り返るなら、人々は当然のように芸術に触れていたわけではなく、往々にして、その機会がきわめて限定されていたことに気付かされる。そういう状況との関わりにおいて芸術作品を捉えなおすことも大事なことであろう。</p>		
3限 (12:45～14:00)	<p>一方、現在はというと、特にインターネットを通じて、誰でも容易に、様々な表現に触れることができる状況となっはいる。しかし、「触れる」を本来の意味で捉え、本当に触れているのか、と問題提起をすることもできよう。美術作品に文字通り手で触れる場合はもちろんだが、美術作品の「もの」としての質感に触れる、あるいは、演奏者の息遣いや演奏会場の空気に触れる、というのも、こちらの意味での「触れる」に相当するだろう。そういう、インターネットを介したのでは決してできない「触れ方」の価値についても、あらためて見なおす必要があるのではないだろうか。</p>		
4限 (14:15～15:30)	<p>この最後の点は、オンライン授業をめぐる問題とも構図が重なってくる。その意味でも、「芸術に触れること」は教育と結びつくテーマといえる。</p> <p>講習では、以上の基本的な問題設定の下、具体例を挙げつつ、自由に考察を展開することとしたい。</p>		
(15:45～16:45)	履修認定試験		